

経過中3回以上 *Clostridium difficile* に関する毒素、抗原、培養検査が行われた31症例の検討

¹東京都健康長寿医療センター 感染症内科、²東京都健康長寿医療センター 臨床検査科

○板倉 泰朋¹、野口 穰²、古川 友子²、安中 めぐみ²、柴崎 澄枝²、増田 義重¹、稲松 孝思¹

【目的・方法】当センター細菌検査室では抗菌薬投与中の下痢例について、2011年以後はC.DIFF QUIK CHEK コンプリット（アリア社製）と培養法を併用しており、抗原検査の迅速化が可能になった。また、同一患者の複数回検査は原則として再発・再燃例や診断困難例のみとしている。今回、2011.10.~2012.04.の354症例由来の554検体の検査結果について集計した中で、3回以上検査されている例が49例見られた。その中で資料が整い詳細な検討が可能であった31症例について、検査結果と臨床経過を対比したので報告する。【結果】31症例は54~98歳の男性19例、女性12例であった。この中14例は毒素、抗原、培養検査いずれも陰性で、*C.difficile*の関与は否定された。毒素陰性・抗原陽性3例は、2例がVCM投与、1例は原因抗菌薬中止のみで経過した。毒素陽性・抗原陽性例の14例は、5例はMNZのみ、5例はVCMのみ、4例は時期をずらしてMNZとVCMの両方が使用された再発・再燃例である。下痢は治癒または改善し、毒素陰性化後も抗原陽性持続例が5例あったが、1例は培養陰性、2例は培養で 10^3 /ml以下、1例はその後陰性化確認、1例は 10^5 /ml以上だが症状は消失している例であった。6例は最終検査後1ヶ月以内に死亡あり、5例は経過中の毒素検出例で、1例は白血病による死亡例で毒素は検出されていない。【考察】従来の検討から毒素陽性は下痢症状との相関が高い。今回の検討で抗原検査と*C.difficile*培養検査は陽性率が近似しており、個々の症例の一致率も高く、迅速に経過を観察するのに有用であった。同一例で検査が繰り返された例は、他疾患で下痢を繰り返したか、*C.difficile*腸炎の再発再燃例、難治例であった。毒素と下痢症状の消失にもかかわらず、転院予定先から抗原陰性化を求められて、検査を繰り返した例があり、対応に一考を要する。

抗菌薬関連腸炎の糞便検査における、毒素、抗原、培養による *Clostridium difficile* 検査について

¹東京都健康長寿医療センター 臨床検査科

○野口 穰¹、古川 友子¹、安中 めぐみ¹、柴崎 澄枝¹、板倉 泰朋¹、増田 義重¹、稲松 孝思¹

【目的・方法】当センターでは、抗菌薬投与中の下痢例について、2011年以後はC.DIFF QUIK CHEK コンプリット（アリア社製）を用い、糞便中の*Clostridium difficile* 抗原および毒素を検査している。また、CCMA培地（日水製薬社製）、MRSA選択培地を用いた*C. difficile*、黄色ブドウ球菌培養検査も併用している。今回、2011.10.~2012.04.の間に行われた554検体の検査結果について集計したので報告する。【結果】まず554検体では、抗原陽性は36.1%、培養陽性は34%で、抗原と培養の陽性一致率は91%であった。毒素陽性は16%であり、抗原陽性例の半数以下であった。毒素陽性、抗原陰性例は0であった。さらに、抗菌薬投与に関連する下痢が疑われた354症例について検査が行われ、238例では経過中1回のみ検査であったが、67例では、経過中2回、49例では3回以上検査が行われていた。なお、同一患者の複数回検査は、原則、再発・再燃例や診断困難例のみとしている。同一患者の初回検査238例のみについてみると、毒素陽性例57例（16.1%）、抗原陽性例112例（31.6%）、*C. difficile*培養陽性例120例（33.9%）、MRSA培養陽性例36例（10.2%）であった。【考察】従来の検討から毒素検査は下痢症状との相関が高かった。今回の検討で抗原陽性例と培養陽性はほぼ一致しており、抗原検査は迅速性に優れるが疫学調査等の為の菌体を確保できない。10年前の培養成績では、*C. difficile*は41.7%、MRSA25%であり、MRSAの検出割合は著減し、下痢関与例もほとんどなくなっている。よって、MRSAを考慮しなくてもよく、VCMではなくMNZの選択で十分治療効果が期待され、コストダウンにもつながると考える。